

# 戦後八十年、私たちにできること

長生村立長生中学校 三年 内匠 さら

私たちは、どれだけ戦争を知っているのでしょうか。私は、過去に起きたことだとわかっていても、自身の体験ではないので、なかなか実感が湧きません。そんな私に、曾祖父は戦争について考えるきっかけをくれました。

戦争の授業を受けたとき、曾祖父が出演していた戦争に関するドキュメンタリー番組のことを思い出しました。家の中を探してみると大切にしまってあった一枚のDVDを見つけました。戦時下を生きた曾祖父について知りたいという思いで見ることになりました。

その番組には、戦時下を生きた曾祖父を含む、被爆した元兵士の方々が映されていました。

当時十八歳だった曾祖父は、兵士として原爆投下後の広島に送り出されたそうです。原爆投下前の「水の都」とも呼ばれる美しい広島は、原爆によって一瞬で姿を変えてしまいました。曾祖父は、そうして焼け野原と化した環境で、まともな食料もなく、原爆の被害を受けた缶詰工場の缶詰を食べたり、川の水を直接飲んだりして、飢えをしのいだといいます。その川には多くの人の遺体があったとも話していて、私は戦後にもそんな過酷な現実があったことを知り、強い衝撃を受けました。兵士の方々は、寝る間を惜しんでけが人を運んだり、遺体を埋葬したりしたそうです。それは、肉体的にも精神的にもとても辛かったと話していました。

その番組には、原爆によって被害を受けた一般の方々も映されていて、横たわっている光景がとても痛々しく、胸が締め付けられました。番組の中で戦争について語る曾祖父は、遊んでくれた楽天的な人とはまるで別人のように、真面目に真剣に話をしていました。その姿からも、戦争に対する思いの強さが伝わってきました。これらの出来事から、私は戦争について考えるようになりました。

平和な時代に、戦時下を生きた曾祖父と過ごせたことを思うと、当たり前毎日がどれほど尊いものかを実感します。

今年で戦後八十年、戦争という出来事をどう受け止め、これからどう未来に活かしていくかが大切だと思います。

私は、歴史を風化させないためにも曾祖父の思いを受け継ぎ、戦争の記憶を語り伝えていきたいです。

「声を上げ続けましょう。私たちの声が小さくなったとき、世界は思いもよらない方向にねじ曲がっていってしまうかもしれないからです。」

これは、黒柳徹子さんの言葉です。戦争という過ちは過去に実際に起きてしまいましたが、戦争を体験した多くの方々のおかげで、私たちはそのことについて知り、考えることができます。

だからこそ、今を生きる私たち一人一人が、平和を守るために知ろうとする姿勢を持ち続けていきませんか。